

臨床における「清拭」援助に関する文献検討

菊 地 由 美*, 門 脇 淳 子*

Literature review that focused on “bed-bath” in the clinical practice.

Yumi KIKUCHI, Junko KADOWAKI*

抄録

臨床における「清拭」援助に関する研究内容を概観し、研究動向から教育への示唆を得ることを目的に、医学中央雑誌 Web 版にて「清拭」「全身清拭」をキーワードとし、過去約10年、「原著論文」で国内文献の検索を行った。結果、238文献が抽出され20文献を対象とし、研究目的、対象、方法について一覧表を作成し研究の動向について分析を行った。患者・看護師の認識に関する研究15件（患者の認識、清拭の身体への影響、清拭の身体・認識への影響、看護師の認識、患者および看護師の認識）、実験研究5件（感染、物品の検証および管理）に分類された。研究対象が患者から看護師へと変化し、内容も患者満足度やケアの充実から看護師の満足度や知識・技術を問うものへと変容していることが伺えた。また、実験研究の件数は少なく、臨床現場で実験的な研究を実施することは困難であることが考えられた。

キーワード：清拭, 看護技術, 臨床, 文献検討

Key words : bed bath, nursing skill, clinical practice, literature review

I. 緒言

高度医療技術の急速な進化に伴い、医療現場においては、検査や治療方法だけでなく、看護師が行うケアの在り方も変化している。宮脇(2018)は、「多忙を極める医療現場では、業務の効率性、安全性が重視され、看護師の行う看護においても、安心、癒し、慰めといったケアで重視すべきコンフォート (comfort) から遠ざかる傾向がある。科学・医療技術が進歩する以前の看護師は、自分自身の五感を活用したケアを提供していた。それは、患者へのまなざしであり、慰めることばであり、そっと触れる、

擦るといったように、患者の傍らにあって自身の身体を用いたケアであった」と述べている。

川島(2020)は、「清拭は身体清潔に加えて「安楽をもたらすケア」の最も象徴的な技術であることを忘れてはならない」と述べている。看護において「清拭」は、まさにケアで重視すべきコンフォートを提供することができる技術であると言えるのではないだろうか。日常生活援助技術は、看護が担う療養上の世話という役割の具現化であり、なかでも清拭は、看護師が目と手を使って実施するケアの代表格であり、看護の原点といわれている(川島, 2011)。しかし

*駒沢女子大学看護学部

ながら、多忙な臨床の中では、時間短縮のために効率性を優先した看護援助が行われている(石川, 2015) のが現状である。

近年、フェイスタオルやウォッシュクロスなどの綿素材のタオルに替えてディスポーザブルの使い捨てタオルを取り入れている施設も増えている。ディスポーザブルの使い捨てタオルであっても、石鹸清拭と同様に快適感や爽快感が得られ、綿タオルよりも清浄度が高く、効率が良いといった報告もされるようになった。一方で皮膚表面温度が低下するという問題点が指摘され、綿タオルの保湿性の方が優れているという報告もある(宍戸, 2016)。

このように、臨床で実施されている「清拭」は時代と共に少しずつ変化している。しかし、看護教育で行われている技術内容は、時代を受けて大きく変容していることはなく、従来通り原理・原則に基づいた形の技術教育であり、臨床との乖離が生じている(菊地, 2019)。また、この乖離について、学生が感じるギャップなどの内容を把握した上で、明らかにされているエビデンスと慣習で行っている技術について、原理原則に立ち戻って考えることができるような教育が必要である(菊地, 2019)。そのためには、「清拭」を教育的視点のみならず、看護師の視点や看護を受ける患者・家族の視点などからも調査し、援助技術の臨床における評価や技術の発展に向けた方法の検討・開発など、多角的に「清拭」という技術について探究することが必要と考えている。

そこで今回は、臨床でどのようなことに関心が置かれたり、課題とされたりしているのか等について、臨床における「清拭」に関する研究論文の動向を調査・分析することで、「清拭」の現状や課題等について明らかにしたいと考えた。

II. 研究目的

臨床における「清拭」援助に関する研究内容を概観し、研究の動向から今後の看護基礎教育への示唆を得ることである。

III. 研究方法

1. 文献選択

医学中央雑誌 Web 版において、「清拭」「全身清拭」のキーワードで、年代を過去約10年(2008～2019年7月)、文献の種類を「原著論文」で国内文献の検索を行った。その中から、看護分野ではないもの、環境を対象としているもの、新人教育や臨地実習に関するものを除外した。さらに、これらの文献の中から教育現場や実験室ではなく、「臨床の場」を研究フィールドとしている文献を最終的な分析対象とした。

2. 文献検討の方法

抽出された各文献から、「清拭」に関する研究内容を概観するために、年・研究テーマ・研究目的・研究対象・研究方法について抽出して一覧表を作成した。次に、研究の内容について研究者間で分析し、その内容分類から研究の動向について分析した。

IV. 結果

「清拭」「全身清拭」のキーワードで文献検索を行い238文献が抽出された。その中から、看護分野ではないもの、環境を対象としているもの、新人教育や臨地実習に関するものを除外した結果、45文献となった。この45文献の中で、清拭の身体・認識への影響に関する研究20件(清拭の身体への影響、清拭の身体・精神への影響、認識)、感染に関する5件、タオルの温度管理に関する1件(計25件)は、非臨床の場で行われた実験研究であり分析の対象から除外した。そこで、本研究では「臨床の場」をフィー

ルドとしている20文献を分析の対象とした。

1. 臨床をフィールドとした研究の概要

1) 患者の清拭に対する認識と身体への影響に関する研究

患者の清拭に対する認識と身体への影響に関する研究は10件（文献No. 1～10）であった。2008年～2013年の期間にはその90%（9件）の研究が行われていた。これらの10件の研究は、清拭に対する患者の思いや満足度などについて明らかにすることを目的としている研究（文献No. 1～5、9～10）が多く、参加観察や半構成的インタビュー、質問紙調査等による研究方法によって、患者の清拭に対するニーズを捉えることを目的として取り組まれていた。これらの研究において、清拭の方法や、タオルの枚数や温度管理、室温、清拭の時間帯などについては、他の項目と比較すると不満を回答している患者が多かった。

清拭が患者の身体に与える影響についての研究（文献No. 6～10）は、清拭時の膀胱温・皮膚温・循環動態の変化、心筋酸素消費量測定、唾液アミラーゼ測定など、身体への影響を客観的測定によって明らかにすることで、効果的かつ患者に負担の少ない清拭を見出すことを目的に取り組まれていた。これらの研究は、低体温療法中の患者や急性心筋梗塞後の患者、ICU入室中の患者、大動脈バルーンポンピング中の患者、胸腔鏡下肺葉切除を受けた患者を研究対象として、侵襲の大きい治療を受けている患者への清拭の影響を検証している研究であった。その結果、清拭前後のバイタルサイン、循環動態、唾液アミラーゼの変化に有意差は認められておらず（文献No. 6、9、10）、身体侵襲は低いものの清拭を不快な体験ととらえている患者や、清拭後の寒さを感じている患者もいた。一方で、急性心筋梗塞後の患者は、清拭による心拍数や心筋酸素消費量が上昇し、清拭後に動悸や呼吸

困難感、不整脈が認められていた。また、清拭による唾液アミラーゼ値の変化に有意差が認められた患者は、処置の有無、男女差、意識レベル清明～Iによって影響を受けていた（文献No. 7、8）。

2) 看護師の清拭に対する認識とその実態に関する研究

看護師の認識に関する6件（文献No. 2、11～15）の研究は、その中の4件（文献No. 2、11、13、14）が質問紙調査による研究であり、清拭に必要な知識、清拭に対する満足度と実態調査について明らかにすることを目的に取り組まれていた。清潔ケアに関する看護師のアセスメントや、その実践について明らかにするための研究（文献No. 12、15）は、非構成的インタビュー（文献No. 12）やエスノグラフィー（文献No. 15）による研究方法が用いられていた。

これらの研究において、看護師は、清拭が自分の価値観や信念を込め、専門的創造的自律的に実践できる技術であり、看護の専門性が発露され患者に快を与えられる技術として、看護実践の拠り所となる技術であると認識していた（文献No. 15）。しかし、清拭方法の実態として蒸しタオル清拭が約8割と最も多く実施され、看護師は蒸しタオル数本による全身清拭による不十分な清拭効果などにジレンマを感じ、半数以上の看護師は自身のケア行為にも満足していなかった。また、ケアを受ける患者の満足も得られていなかったという結果もあった（文献No. 11、14）。さらに、臨床経験4年目までの看護師を対象に行った清拭に関する現状調査では、先輩の指導を受けていない看護師は47%、患者にいつも声掛けをしている看護師49%は約半数に留まっていた（文献No. 2）。

清潔ケアに必要なアセスメント内容は、「観察から得た患者の状態」「看護師の援助経験、自身の経験」「病棟のルール・習慣」「雰囲気」

「業務量」「設備」であり、全身清拭の知識項目として高い水準で同意の得られた項目（105 / 139項目）は、＜入浴禁忌の条件＞、＜清潔援助方法の選択を判断するための観察の視点＞、＜入浴動作に伴う循環器・呼吸器への影響＞、＜全身清拭実施時の留意点＞であった（文献 No. 12、13）。

3) 清拭に関する実験研究

臨床の場における実験研究は、感染に関する研究（2件）と、清拭に用いる物品の検証とその管理に関する研究（3件）であった。2009年に簡単クロスと従来の清拭タオルの温度変化を比較した研究（文献 No. 18）の後、2019年「清拭用ホットクロス」と従来の清拭タオルによる患者の満足度や看護師の効率性・負担感についての研究（文献 No. 20）が行われるまで、10年間患者を対象とした物品の検証は行われていなかった。

これらの研究において、清拭タオルからはさまざまな常在菌が多く検出されたり、清拭車については注水タンクから加温庫内に通じる部分から細菌が検出されたが、消毒されたタオルからは菌が検出されず、清拭タオルの臭いに対して不快を感じる割合も減少した（文献 No. 16、17）。また、物品に関する研究では、約6割の施設で再生使用タオルが導入され、約3割の施設でディスポーザブルの清拭タオルが導入されていた。再生使用タオルの洗濯工程については、熱水以外の清毒が組み込まれている施設は半数以下であった。多くの施設では菌の繁殖を防ぐために湿潤、加温した後の再生タオルの時間管理が行われていたが、洗濯から使用までの管理については課題が指摘されていた（文献 No. 19）。清拭で用いる綿タオルと保温性のある不織布タオルによる物品の検証では、患者の評価では不織布の方が「温かさ」「肌ざわり」「気持ちよさ」の数値が高く、看護師の評価において

も不織布の効率性の方が高く、負担感が低かった（文献 No. 20）。

2. 年代別における研究内容の動向

1) 2008年～2013年の特徴

この期間の特徴は、患者・看護師の認識に関する研究が11件（73%）であり、患者の思いや満足度など患者からの評価やニーズを捉えることを目的に取り組まれていた。また、この期間に臨床において取り組まれた実験研究は2件（文献 No. 16、18）のみであった。

2) 2014年～2019年の特徴

この期間の特徴は、患者・看護師の認識に関する研究が4件（27%）のみであり、その中で看護師の認識を問う3件の研究（文献 No. 13、14、15）は、清拭に必要な知識、看護師の清拭に対する満足度と実態調査、清拭に対する看護師の認識について明らかにすることを目的に取り組まれていた。また、この期間に臨床において取り組まれた実験研究は3件（文献 No. 17・19・20）であった。

V. 考察

本研究で臨床をフィールドとした文献は20件であり、その内容は、患者・看護師の認識に関する研究（患者の認識、清拭の身体への影響、清拭の身体・認識への影響、看護師の認識、患者および看護師の認識）と実験研究感染、物品の検証および管理）であった。これらの文献から、臨床における「清拭」援助に関する研究からみえる現状と教育への示唆について考察する。

1. 臨床における「清拭」に関する研究の動向からみえてくる現状

先ず臨床における「清拭」に関する研究の動向としてみえてきたことは、研究対象が患者から看護師へと変化していることである。研究内

容に関しても、患者満足度やケアの充実などを評価する視点から、看護師の満足度や知識・技術を問うものへと変遷していることが伺える。また、臨床で行われている実験研究の件数は非常に少なく、臨床現場で実験的な研究を実施することが難しいことが考えられた。研究対象が患者である場合、より慎重な倫理的配慮の必要性、手続きの煩雑性などもその要因として考えられた。一方で、「清拭」に関する研究論文の全体的な傾向として、実験研究が主流となっており、特に2015年以降、「清拭」の身体への影響を明らかにするための健常者を対象とした研究が急増しており（下地，2016；山下，2016；松本，2018；佐久間，2018；小島，2018；石井，2019）、その方法論も多岐にわたっている。また「清拭」に関連した感染に関する研究件数も2014年度以降急速に件数が伸びている（松村，2014；平野，2015；石原，2017；石井，2018）。これらは、臨床では実施困難な実験研究が非臨床の場で実施されているといった結果を示すものであり、エビデンスが求められる時代背景も影響していると思われる。また、看護教育機関においても2008年に166校だった大学が2019年には272校にまで増え（厚生労働省，2019）、看護教育の大学化が加速し、大学院教育の充実なども影響していると言えよう。これらが「清拭」に関する研究動向の全体的な特徴である。

2. 基礎看護学教育への示唆と課題

時代背景と共に看護業務は、患者の安全性や効率性が重要視され、在院日数の短縮化を受け、必然的に診療治療業務を中心とした流れとなっている。そのため、日常生活援助は看護師業務から補助者業務へと移行されていく流れも否めない（中岡ら，2017）。しかし、患者の病床環境は、治療の場として我慢を強いられることが

日常となり、生活の場というニュアンスが薄れているのではないだろうか。日常生活援助に対する看護師の思いは、深田ら（2007）の「臨床看護師の49%が清潔ケアに負担を感じている」という報告からも、以前から既に明らかにされていたことである。今回の研究の動向と合わせて考えてみると、患者中心に考えられていた研究のテーマの中心が、看護師の満足度や知識や技術へとシフトしており、臨床の場以外の部分も含めた全体的な傾向としては、実験研究が中心となっていることが明らかとなった。これは、看護の科学性が求められている結果として、エビデンスやアウトカムを追及する現れであろう。これは、看護を発展させていく上で必要不可欠なことであるので喜ばしい傾向である。大学教育が充実し、看護職が研究に向かう機会が増えた結果でもあり、看護の発展にも寄与できると考える。本来、看護研究の目的は最終的に患者に役立つものでありたいと願っているが、実験研究の実現可能性は高いが患者に接近したものではないため、患者の実情とはかけ離れたものになる可能性もある。その特徴を理解した上で、研究成果を取り扱っていく必要があると思うが、その成果がどれだけ臨床現場に還元されているのかは疑問である。研究成果を臨床現場に還元し、実践され、その成果が本当に役立つものであるのかという検証がなされなければ、患者に役立つ看護研究とは言えないと考える。「清拭」が本来の形から簡略化され、看護師が担う役割からも薄れつつあり、実験研究によってエビデンスを明らかにしていく傾向がある現状において、「清拭」がもつ意味をもう一度考えてみることも大切ではないかと考える。

「清拭」の目的は、単に身体を清潔に保つだけでなく、拭く行為によってもたらされる効果、温熱刺激によってもたらされる効果、看護者とのコミュニケーションによってもたらされ

る効果など多岐にわたるものである。「温かい」「気持ちよい」「さっぱりする」などの快の感覚は、人を安心させ安楽をもたらし、気持ちを前向きにするとされている。また、生理学的には副交感神経優位となって自然治癒力に通ずるものである（川島，2020）。医療行為に依存せず看護師独自に行える行為によって多くのメリットが期待できる「清拭」は、エビデンスとしての可視化は難しく、変化も微細である。しかし、看護による「気持ちいい」から生まれる患者の回復力に影響をもたらすだけでなく、行為の実践によって患者から「ありがとう」という言葉をもろう看護師自身も、看護職としての「やりがい」や「やる気」といった満足感を与えていただいているのではないだろうか。

従って、教育の視点としては、臨床現場で「清拭」援助の提供される形が変容しようとも、基本技術の原理原則を看護教育の柱として教授していく必要があると考える。また、臨床経験豊富な教員が臨床での「清拭」援助について経験を語り、「清拭」援助の研究結果として可視化できない有用性についても意識付けを行うことも必要であろう。更に、臨床での経験知を学生に伝承していくためには、豊富な臨床経験をもつ看護師の役割が大きく、臨地実習において学生は受け手患者への看護実践を体感しつつ、経験豊富な看護師が自身の看護実践を示すことで、臨床での経験知に触れる機会となることが望まれる。

VI. 結論

1. 「清拭」研究の動向として、臨床において患者・看護師の認識に関する研究は、対象が患者から看護師へと変化し、内容も患者満足度やケアの充実から看護師の満足度や知識・技術を問うものへと変容していることが伺えた。

2. 臨床における実験研究では、件数は少なく、対象に対する倫理的問題もあるため、臨床現場で実験的な研究を実施することは困難であることが考えられた。

VII. 本研究の限界と課題

今回は、「清拭」に関しての臨床における「清拭」援助に焦点を当て、原著論文に限定して文献検討したため、分析対象が20文献と少なかった。したがって、動向を把握する限界があった。今後は、「清拭」に関する研究結果がどのように還元されているのか、特に臨床以外の場をフィールドとした研究成果を臨床に役立つものにどう繋げていくかなどについて探究していきたい。

表1 患者の清拭に対する認識と身体への影響に関する研究

内容分類	論文タイトル	著者 (発行年)	対象	研究目的	方法	分析および結果	文献 No.
患者の認識	術後4日目の清潔ケアに関するセルフケアに影響を与える要因	国元加藤 (2008)	患者 4名	術後4日目の清潔ケアの現状とセルフケアに影響を与えている要因を明らかにし、今後の看護介入への示唆を得る	参加観察と半構成的インタビュー	術後4日目の清潔ケア状況は、すべて自分で行っていたものが1名で、残りの2名はケアを行っていないかった。インタビューで語られた内容を質的帰納的に分析した結果、清潔セルフケアに影響を与える要因は【身体的要因】【環境的要因】【精神的要因】【身体的要因】のサブカテゴリーには【創痛】【創痛以外の身体的症状】【ルー ト類による不快感】【精神的要因】のサブカテゴリーには【患者用バスマ】【説明・指導】【生活環境】、【精神的要因】のサブカテゴリーには【清潔に関する欲求】【不安感】【過剰】などがあつた。	1
	よりよい「清拭」への取り組み	宇井 (2009)	看護師 47名 患者73名	看護師の「清拭」の意識・現状を明らかにすると同時に患者の満足度も明らかにする	質問紙調査、シンポジウム、意見交換、患者アンケート	採用1〜4年の看護師を対象に「清拭」の意識・現状調査を行い、シンポジウムを開催して意見交換を行った。また患者に「清拭」についての満足度調査を実施し100名中73名から回答を得た。回収は看護師4名中47名(回収率73%)であった。清拭しながら患者にいても声かけをしている看護師は49%、清拭について先輩の指導を受けていない看護師は47%もあり、マニュアルの周知も十分ではなかつた。患者満足度調査では「満足」、「やや満足」が8割を占めたが、「方法」、「タオルの温度」、「後片付け」に満足していない回答があり、「看護師の言葉かけ」には95%が満足していた。以上より「知識・技術の不足」と「OITの機能不足」が指摘された。	2
	清拭の援助に対する患者の思いを知る 整形外科手術患者を対象としたインタビュー調査より	奥川四崎 濱口 (2010)	患者 21名	当該施設で行われている術後の清潔ケアについての患者の思いを明らかにするため	半構成的インタビュー	整形外科手術後患者に行っている清潔援助は、毎日の全身清拭・陰部洗浄に加え、4日に回洗髪、術後10日目に抜糸後のシャワー浴について患者がどのようなように思っているのかを明らかにするため、シャワー浴を開始した時期の患者を対象にインタビューを行い、語られた内容を記法で分析した。その結果、【清潔習慣の変化】【清潔援助に対する思い】【自立心】というカテゴリーが抽出された。【清潔援助に対する思い】のサブカテゴリーには【満足】【不満足】【速感】【柔軟心】【諦め】があり、【自立心】のサブカテゴリーには【元の生活レベルへの欲求】【自立への不安】【自立の喜び】があつた。	3
	入院患者の清拭に対する満足度調査から得られた今後の方向性	島山芦蔵 (2011)	患者 186名	清拭に関する満足度を明らかにする	質問紙調査による満足度調査	清拭を必要とする3日以上入院患者200名を対象に、タオルの枚数・タオルの温度・時間・清拭回数・清拭時の室温・ブラライバシーの配慮・拭き方に対する満足度についてアンケート調査を行い、186名の有効回答を得た(回収率93%)。各項目とも78〜86%の患者が満足していたが、タオルの枚数・清拭の時間・清拭時の室温は不満を感じている割合が高かつた。清拭に対する満足度を高めるためには患者の状況に応じた援助を計画し追加していく必要があると思われた。	4
	患者のリハビリテーションスケジュールに合わせた清拭の効果	小松生々木、 小松 (2013)	患者 22名	患者のスケジュールに合わせて清拭時間の調整を行うことで、患者の満足度がどのように変化するか明らかにする	介入研究による患者の満足度調査	朝の申し送り終了後、各チームに分かれ部室に清拭を実施していたが、患者の満足度調査では、【身体を拭く時間帯】の項目で22名中7名(32%)が「どちらでもない・不満」という結果であつた。そこで、患者のスケジュールに合わせて清拭時間の調整を行った結果、【身体を拭く時間帯】について22名中19名(86%)が「満足」と回答した。残りの3名は「どちらでもない」と回答し、その理由は「リハビリ後でも良い」であつた。	5

*○の中の数字は文献数

表1 患者の清拭に対する認識と身体への影響に関する研究(つづき)

内容分類	論文タイトル	著者 (発行年)	対象	研究目的	方法	分析および結果	文献 No.
③ 身体への影響	低体温療法中の全身清拭による身体への影響	里見三潮 植村 (2012)	患者	低体温療法中の全身清拭による体温への影響を明らかにし、効果的な方法を見出す	1分ごとの膀胱温・皮膚温・循環動態の変化を追跡調査	低体温療法中の全身清拭による体温への影響は、膀胱温は最大1.9°Cの変動がみられた。膀胱温・平均皮膚温とも個人差はあるが、清拭中に下降しておりこれらの温度変化は清拭終了後に上昇しており気化熱によるものと考えられる。膀胱温に関しては、1~4分後には清拭開始時体温に戻っており、清拭開始時と終了時の膀胱温の差は0.2°Cであった。急激な体温は様々な合併症を来すとされているがその範囲からは逸脱してはいない。血圧にも若干の変動は認められたが、その後循環動態は安定していた。以上のことから、現在行っている全身清拭の方法は、身体への侵襲が少なく低体温療法中でも行うことができる。と考える。	6
	急性心筋梗塞患者の清拭・更衣動作による心筋酸素消費量を最小にするための援助	川村 (2013)	患者 1名 60代男性	ICU入室中患者に全身清拭が与えるストレスについて明らかにする	清拭中の心筋酸素消費量(PPR)測定	peak CPK値を過ぎたPC後2日目よりケア計画に従い、清拭援助を開始し心筋酸素消費量(PPR)を測定した。RRPは1、2日目の全介助下で清拭中から上昇し、清拭終了後に回復し、胸部症状、不整脈の出現は認めなかった。1日目の清拭中制座位時のPPRは減少した。心拍数、PRPは3、4日目の部分介助下で清拭中から20%以上上昇し、清拭後速やかに回復せず、特に4日目の清拭中では減少した。	7
	ICU入室中における患者のストレスについて全身清拭による唾液ミラーゼ値の検証	新妻伊藤 佐藤 (2017)	患者 80名	ICU入室中患者に全身清拭が与えるストレスについて明らかにする	清拭前後の唾液アミラーゼ測定	清拭前より清拭終了時に唾液アミラーゼ値が上昇した患者は35名(男性20名、女性15名)で、変動しなかった患者は5名、低下した患者は40名であった。80名中、処置ありの患者は21名となった。清拭前より終了時に唾液アミラーゼ値が上昇した群と低下した群では有意差が認められなかった。唾液アミラーゼ値が上昇した群の処置を行なった患者と行っていない患者では有意差が認められた。清拭前より終了時に唾液アミラーゼ値が上昇した群の男女差で有意差が認められた。	8
② 身体・認識への影響	大動脈バルーンパンピング装着患者の清拭の効果 自律神経活動と患者の語り	櫻井井上 (2011)	患者 8名	IABP装着患者への清拭について、患者の評価を量的・質的データから苦痛緩和に有効な清拭を検討する	重：アミラーゼ、心拍変動 質：インタビュー	重データは唾液アミラーゼ活性と心拍変動の高周波成分(0.15-0.40Hz)とし、清拭前後の分析にはWilcoxon符号付順位和検定を使用した。質データは患者の体験として質的・帰納的に分析し、分析して得られたカテゴリの分類にDonabedianの枠組みを使用した。重データを清拭前後と比較した結果、唾液アミラーゼ活性が低下を示したものは58場面中5場面、清拭前後の変化に有意差はなかった(p=.866)。また心拍変動の高周波成分の変化が上昇を示したものは全8場面中5場面、有意差はなかった(p=.161)。質データを分析した結果、自律神経活動の変化で快適さが示された患者も、清拭方法に負の評価を示すことや、清拭を不快な体験と捉えることがあった。また自律神経活動の変化で快適さが示されなかった患者も、看護師の気遣いを感じ、安心や信頼が示されることがあった。これらのことから清拭は、快適さだけでなく不快さを提供する可能性があることが、看護師が安楽を提供しようとする中で、患者が安楽になる力を得ていることも示唆された。また循環動態を管理する知識は、自信を持ってIABP患者を動かすために必要であるが、患者が看護師を信頼し安楽になるためにも重要であることが示唆された。	9
	術後保護下にある患者に全身清拭が与える影響 胸壁腫下筋層切除を受けた患者のバイタルサインの推移からの検討	吉田小沢 荒木 (2012)	患者 24名	全身清拭がバイタルサインや温度感覚に与える影響を明らかにする	清拭前、直後、終了後5分、10分、20分、30分のバイタルと温度感覚の主観的評価	清拭前、直後、終了後5分、10分、20分、30分に体温、観血的血圧、心拍数、呼吸数は、全ての時間経過において1°C以上の変化はみられず、鼓膜温、体表温とも有意差は認められなかった。観血的血圧の変化は10mmHg範囲内であった。心拍数は時間経過別では10回/分以上の変動のある患者はいなかったが、5分後から心拍数が減少する傾向がみられた。呼吸数は清拭前後で変化がなかった。清拭前に比べ、直後に温かいと感じたのは5名、寒いと感じたのは6名であった。また、温度感覚に関する患者の主観的評価の聞き取り調査では、4名が清拭終了後30分に寒いと答えていた。	10

* ○の中の数字は文献数 文献検索期間の前半 (2008~2013年)

表2 看護師の清拭に対する認識とその実態に関する研究

内容分類	論文タイトル	著者 (発行年)	対象	研究目的	方法	分析および結果	文献 No.
看護師の認識⑥	泡沫状洗淨清拭と蒸しタオル清拭において皮膚変化と爽快感についての比較検討	坂本福毛高橋(2008)	看護師230名 * (通常者33名)	病棟で行われている、清拭方法、その選択理由について、清拭方法、その選択理由について明らかにする。(さらに、清拭方法による皮膚変化の違い、爽快感について調査する)	質問紙調査 *(実験)	病棟看護師を対象に、清拭方法、その選択理由について質問紙調査を行ったところ、方法は蒸しタオルが一番多く、次いで泡沫状洗淨であり、理由は「患者の汚れる程度」「患者希望」が多かった。*(記入33名を対象に、右背部・上肢を蒸しタオルで、左背部・上肢を泡沫状洗淨清拭し、爽快感の違い、爽快感について調査した。水分量、経表皮水分蒸散量、PH値、皮膚表面の粗さ、滑らかさ、鱗屑、しわを測定し数値化した結果、清拭後は泡沫状洗淨清拭の方が有意に水分量が多かつたが、経表皮水分蒸散量は高かつた。30分後は蒸しタオル清拭の方が有意に滑らかになった。しわ・粗さ・鱗屑・PHに差は認めなかつた。爽快感については、泡沫状洗淨清拭で有意にスースー・ひんやりした感じ等の刺激や感触、臭いを感じられた。どちらが良かったかについては、やや泡沫状洗淨の方が多かった。)	11
	看護師が臨床で行っている清潔ケアに関するアセスメントの特徴	一色山(2009)	看護師4名	看護師が臨床で行っている清潔ケアに関するアセスメントの内容を明らかにし、その特徴を考察すること	半構造的インタビュー 質的機能的分析	6年以上の臨床経験年数を有し、過去半年以内に日常的に清拭を行っていた看護師を対象に、半構造的面接を行い質的帰納的に分析した。面接の逐語録からアセスメント内容を表す文脈を抽出し、コード化、カテゴリー化した。その結果、看護師が臨床で行っている清潔ケアに関するアセスメントの内容について6カテゴリが形成された。これらのカテゴリからは、看護師は観察から得た患者の状態や、看護師の援助経験、自身の経験などを根拠としたり、病棟のルール・習慣や雰囲気、業務量、業務などの看護師を取り巻く環境を根拠としたりして、状況に即したアセスメントを行なっているという特徴が示唆された。また、看護師は患者の心身に及ぼす危険性や援助の有効性を推測したり、患者の現在の状況を即座に判断、療育したりして、最善の清潔ケアの提供に向けたアセスメントを行なっているという特徴が示唆された。	12
よりよい「清拭」への取り組み		宇井(2009)	看護師47名 患者73名	看護師の「清拭」の意識・現状を明らかにすると同時に患者の満足度も明らかにする	質問紙調査と シンポジウム で意見交換、 患者アンケート	採用1~4年の看護師を対象に「清拭」の意識・現状調査を行い、シンポジウムにて意見交換を行った。また患者に「清拭」について満足度調査を実施し100名中73名から回答を得た。回収は看護師64名中47名(回収率73%)であった。清拭しながら患者についても声をかけている看護師は49%、清拭は49%、清拭について先輩の指導を受けていない看護師は47%もあり、マニュアルの周知も十分ではなかつた。患者満足度調査では「満足」、「やや満足」が8割を占め、「看護師の言葉かけ」には95%が満足していたが、「方法」「タオルの温度」「後片付け」に満足していない回答があつた。以上より「知識・技術の不足」と「OITの機能不足」が示唆された。	2
デルファイ法による臨床現場が求める全身清拭の知識項目に関する調査研究		中山山内(2014)	看護師 第1回調査55名 第2回調査49名 第3回調査39名	臨床現場ではどのような知識項目が必要であると考えられているかを明らかにし、看護基礎教育における全身清拭に関する教育への示唆を得る	質問紙調査 (デルファイ法を用いた量的記述的研究)	全身清拭の知識項目139項目中105項目が51%以上の同意となつた。同意率の分類では大項目<入浴禁忌の条件>、<清潔援助方法の選択を判断するための観察の視点>、<入浴動作に伴う雑音器・呼吸器への影響>、<全身清拭実施時の留意点>のうち52項目の小項目が高い同意率となつた。さらに51%以上の同意にいたらなかつた知識項目は、139項目中34項目で<全身清拭実施時の必要物品>、<全身清拭の手順>の項目であった。以上の結果から、患者の状態判断と判断のための観察の必要性が示唆された。重症患者が日々以上で観察力と判断力が求められていると考えられた。さらにコミュニケーション能力向上の必要性が示唆された。一方、51%以上の同意にいたらなかつた知識項目については、看護の原理・原則を踏まえ整理する必要があると考えられた。	13
大規模病院の入院患者への全身清拭について、看護師の満足度に関する調査		Matsushima, Fukui(2018)	看護師1,030名	全身清拭の実態と、ケア行為に対する看護師の満足度、看護師が感じている患者の認識を把握する	質問紙調査	1)全身清拭のなかでは、蒸しタオル清拭は約8割と最も多く実施されていた。2)半数以上の看護師は自身のケア行為に満足しておらず、入院患者も満足していないと感じていた。3)自身のケア行為に看護師が満足していないのは、業務の多忙さ、人員不足、不十分な清拭効果などの理由であった。看護師は蒸しタオル数本による全身清拭では効果的でないケアが提供できていないことにジレンマを感じていた。また、看護師は以前からの慣習で、ケア行為を行っている実態も明らかになつた。	14
看護師にとつての清拭の意味、清拭のエスノグラフィ		並合(2019)	看護師33名 一般病院(消化器外科)緩和ケア病棟	看護師が清拭をどのように実践しているのかを明らかにする	エスノグラフィ 参加観察とインタビュー	看護師は、清拭を患者に快を与えられる「技術」として、専門的知識を活用して創造的に実践していた。また、患者との感覚の共有によって、より深く患者とかわかることで「患者がみえる」と捉えていた。看護師は清拭を看護実践には欠かせない技術だと認識し清拭なしでは看護したとはいえない」と考えていた。結論:清拭は、安楽の提供という看護師の役割を遂行する最も有効な手段であり、看護職としての自信ややりがい、誇りを見出すことができる技術である。清拭は、看護師が自分の価値観や信念を込め、専門的創造的・自律的に実践できる技術であり、看護の専門性が発露される、看護実践の拠り所となる技術である。	15

表中の*() は非臨床フィールドにおける研究内容

*○の中の数字は文献数

文献検索期間の前半(2008~2013年)

表3 清拭に関する実験研究

内容分類	論文タイトル	著者 (発行年)	対象	研究目的	方法	分析および結果	文献 No.
感染②	清拭タオルの管理の見直し 不快なく使用するために	瀬川寿山 佐藤 (2008)	患者・家族 8名 看護師 21名	清拭タオルを不快なく使用する ための管理方法の見直し	質問紙調査、 タオルの細菌 の検出(見直 し介入前後)	清拭タオルの清潔についてアンケート調査を実施した結果、スタッフの半数以上が「汚い」と思い、そのうち臭いに対する不快感を持つ人は67%であった。培養の結果、清拭車本体の中からは検出されなかったが、清拭タオルからはさまざまな常在菌が多く検出された。24時間加湿、洗濯後乾燥、10分間消毒の各方法で改善を図みた結果、いずれの方法でも常在菌が減少し、特に消毒したタオルからは菌が検出されなかった。また改善後のアンケート結果では、スタッフ18名、患者あるいは家族13名とも不快に感じる割合が減少した。消毒時間を変更する方法はコストがかからず、看護補助員の業務にも支障を与えないため、最も取り入れやすい方法であると思われた。	16
	当院の清拭タオルと清拭車に行った細菌検査の報告	斎藤細川 北澤 (2014)	物品	清拭車・清拭タオルの細菌検査	検体の培養検査	作成直後の清拭タオルと、清拭車の表面(フタの表面)、清拭車の内側および注水口の中からスワブ法で検体を採取した。清拭タオルについては、作成して数日後のタオルからBacillus属が検出された。清拭車については、注水タンクから加湿車内に通じる部分でAcinetobacter属とPseudomonas oryzihabitansが検出された。清拭車の表面と清拭車のタオル設置部分から細菌は検出されなかった。	17
物品の検証 および管理 ③	夏期における清拭タオルの冷めにくさの検討 簡単クロソスの有効性	橋本中村 平岡 (2009)	患者 3名	全身清拭時の簡単クロソスの温度の変化を測定し、従来の清拭タオルとの比較からその効果を検討する	全身清拭時の 簡単クロソスの 温度変化の測定	ウォッシュクロソスを用いて作成した清拭タオル(簡単クロソス)の効果を、従来の清拭タオルとの比較から検討した。その結果、従来のタオルに比べてコンパクトにたたみやすく、厚みが出せる簡単クロソスは温度低下が緩徐で冷めにくいことから、患者に不快を与えないタオルであることが分かった。	18
	国内医療施設を対象とした患者清拭タオルの管理に関する実態調査	鎌田聖原 (2016)	78施設	患者清拭タオルの管理方法についてその現状を明らかにする	質問紙調査	61施設で患者使用タオルが導入され、34施設でディスプレイの清拭タオルが導入されていた。再生使用タオルの洗濯には外部委託業者に依頼している施設と自施設で実施している施設があり、洗濯工程に熱水以外の消毒工程が組み込まれている施設は半数以下であった。一方、半数以上が、再生使用タオルの使用期限を決めていた。最も多く使用されている加温器具は電動式蒸気加温器(清拭車)であった。結論:再生使用タオルを使用している施設が半数以上を占めた。菌の繁殖を防ぐため多くの施設で温潤、加湿した後の再生タオルの時間管理がされていたが、洗濯工程の管理、搬入から使用までの管理については課題がみられた。	19
	清拭用ばつとクロソスを用いた入院患者への清拭の有効性およびその効果性と看護師の負担に関する研究	佐藤安保、澤 (2019)	患者 看護師	「清拭ばつとクロソス」と従来の清拭方法と比較検討する	準実験研究 (質問紙調査)	質問紙調査による綿タオルと保溫性のある不織布タオルの比較を Wilcoxon の符号順位検定で解析し、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。自由記述項目は、質的統合法 (K)法を用いた作業過程 (ラベル作り、グループ編成、図解化、図解化の段階)を経て分析を行った。患者の評価では「温かさ」「肌ざわり」「気持ちよさ」の数値が従来法に比べて有意に高かった。効果性は従来法に比べて有意に高く、看護師の負担は有意に低かった。	20

*○の中の数字は文献数

文献検索期間の前年 (2008~2013年)

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 深田美香, 勝田明子, 南前恵子, 他 (2007):
看護師の行う清潔援助の方法と実施頻度および使用用具についての実態. 日本医学教育学雑誌, 16, 66-70.
- 橋本 亜矢子, 中村 栄子, 平岡 由美子 (2009):
夏期における清拭タオルの冷めにくさの検討 簡単クロスの有効性, 山口県看護研究会学会学術集会プログラム 集録8回, 82-84.
- 畠山 貞子, 齊藤 みどり, 柴 由美 (2011):
入院患者の清拭に対する満足度調査から得られた今後の方向性, 由利組合総合病院医報, (21), 77-78.
- 平野 和美, 熊田 美和, 戸野塚 久紘, 他 (2015):
清拭タオルの洗濯を熱湯消毒と消毒処理の異なる +H7を比較する, 日本看護技術学会誌, 13 (3), 243-246.
- 石井 和美, 中田 弘子, 小林 宏光, 他 (2019):
ディスプレイ用拭き取り紙を用いた部分清拭が高齢者の皮膚に与える影響, 日本看護技術学会誌, (18), 17-25.
- 石井 美帆, 細川 泰香, 三星 知, 他 (2018):
電子レンジ加熱での清拭タオルの温度変化と加熱による *Bacillus cereus* 菌量の変化, 日本臨床微生物学雑誌, 28 (4), 276-278.
- 石原 由華, 宇佐美 久枝, 畠山 和人, 他 (2017):
清拭タオルの *Bacillus cereus* 汚染を高感度に検出する改良ビーズ抽出法, 日本環境感染学会誌, 32 (2), 85-88.
- 石川 美智子 (2015):
基礎看護技術教育における「全身清拭」の演習方法に関する検討, 獨協医科大学看護学部紀要, 8巻, 89-97.
- 一色 美穂, 松山 友子 (2009):
看護師が臨床で行なっている清潔ケアに関するアセスメント

の特徴 清拭に焦点を当てて, 国立病院看護研究学会誌, 5 (1), 30-39.

- 鎌田 明, 菅原 えりさ (2016):
国内医療施設を対象とした患者清拭タオルの管理に関する実態調査, 医療関連感染, 9 (2) 52-60.
- 川村 麻記 (2013):
急性心筋梗塞患者の清拭・更衣動作による心筋酸素消費量を最小にするための援助 心筋酸素消費量 (PRP) を測定して, 群馬県救急医療懇談会誌, 9, 59-61.
- 川島 みどり (2011):
触れる・癒やす・あいだをつなぐ手: TEARTE 学入門. 東京, 看護の科学社.
- 川島 みどり (2020):
看護における清拭技術の今日的課題, 看護実践の科学, 45 (1), 14-19.
- 菊地 由美, 門脇 淳子 (2019):
基礎看護技術教育における「清拭」に関する文献検討, 駒沢女子大学研究紀要【人間健康学部・看護学部編】, (2), 115-128.
- 厚生労働省 (2019):
大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2019年度看護系大学に係る基礎データ, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2019/05/27/1417062_4_1.pdf (2020, 9, 18閲覧)
- 小林 甫, 山田 美季, 池田 雪花, 他 (2014):
電子レンジ加熱による清拭タオルの有効性に関する検討 温湯清拭タオルとの経時的温度比較, 日本看護技術学会誌, 13 (3), 200-210.
- 小島 悦子, 藤長 すが子, 草薙 美穂 (2018):
清拭方法の違いによる皮膚表面 pH、汚れの除去、主観への影響, 日本看護技術学会誌, (17), 43-50.
- 小松 尚子, 佐々木 勝志, 小松 かづ子 (2013):

- 患者のリハビリテーションスケジュールに合わせた清拭の効果, 由利組合総合病院医報, (23), 12-14.
- 国本 香織, 加藤 典子 (2008) : 胃癌術後患者の清潔に関するセルフケアに影響をあたえる要因, 神奈川県立がんセンター看護師自治会看護研究部会看護研究集録, (14), 76-79.
- 松本 勝, 大貝 和裕, 大橋 璃子, 他 (2018) : 拭き取りによる洗浄剤除去方法が皮膚汚れ除去効果に及ぼす影響, 看護理工学会誌, 5 (1), 22-30.
- 松村 千鶴, 深井 喜代子 (2014) : 綿タオルと化繊タオルの細菌学的検討, 日本看護技術学会誌, 13 (3), 243-246.
- Matsumura Chizuru, Fukai Kiyoko (2018) : 大規模病院の入院患者への全身清拭についての看護師の満足度に関する調査, 香川県立保健医療大学雑誌, 9, 41-47.
- 宮脇 美保子 (2018) : 看護におけるケアの再考, KEIO SFC JOURNAL, 18 (2), 120-134.
- 中川 名帆子, 山内 豊明 (2014) : デルフアイ法による臨床現場が求める全身清拭の知識項目に関する調査研究, 日本看護技術学会誌, 13 (2), 117-125.
- 中岡亜希子, 渋谷幸, 富沢理恵, 他 (2017) : 質の高いケアを目指す看護師・看護補助者共同システム確立のための基礎的研究, 科学研究費助成事業研究成果報告書.
- 新妻 香織, 伊藤 まどか, 佐藤 朋美 (2017) : ICU入室中における患者のストレスについて 全身清拭による唾液アミラーゼ値の検証, 仙台医療センター医学雑誌, 7 (1), 36-40.
- 斎藤 智, 細川 和子, 北澤 淳一 (2014) : 当院の清拭タオルと清拭車に行った細菌検査の報告, 黒石病院医誌, 20 (1) 109-111.
- 坂本 麻衣, 福毛 良美, 高橋 千春 (2008) : 泡沫状洗浄剤清拭と蒸しタオル清拭においての皮膚変化と爽快感についての比較検討, 東京医科大学病院看護研究集録, 28回, 33-37.
- 佐久間 愛里, 高橋 由紀, 大江 佳織, 他 (2018) : 急性期心疾患患者の自立に向けた基礎研究 健康な成人男性における自己清拭動作と心負荷との関連性, 日本看護技術学会誌, (17), 80-89.
- 櫻井 文乃, 井上 智子 (2011) : 大動脈バルンパンピング装着患者への清拭の効果 自律神経活動と患者の語りの調査より, お茶の水医学雑誌, 59 (2-3), 121-128.
- 里見 由美子, 三瀬 留理子, 種村 郷子 (2012) : 低体温療法中の全身清拭による身体への影響, 共済医報, 61 (4), 379-382.
- 佐藤 悦子, 安保 弘子, 澤 征子 (2019) : 清拭用ほっとクロスを用いた入院患者への清拭の有効性およびその効率性と看護師の負担に関する研究, 日本看護学会論文集: 慢性期看護, (49), 334-337.
- 瀬川 亜沙美, 秋山 千恵, 佐藤 あかね (2008) : 清拭タオルの管理の見直し 不快なく使用するために, 岩見沢市立総合病院医誌, 34 (1), 65-68.
- 澁谷 幸 (2019) : 看護師にとっての清拭の意味 清拭のエスノグラフィー, 日本看護研究学会雑誌, 42 (1), 43-51.
- 宍戸 穂, 武田さちか, 細川裕也, 他 (2015) : 清拭時に温タオルを短時間貼用する効果の検証 皮膚表面温度・角質水分量・ATP値の変化および主観的評価より, 日本看護技術学会誌, 14 (2), 185-194.
- 宍戸 穂, 矢野 理香 (2016) : 「清拭」の統合的文献レビュー, 日本看護技術学会誌, 15 (2), 52-62.

- 宍戸 穂, 矢野理香 (2016) : 高齢者への清拭
における有効な温タオルの貼用時間の検討
貼用なし清拭と貼用あり (7、10秒) 清
拭との比較, 日本看護技術学会誌, 15 (2),
188-194.
- 下地 千晶, 内海 桃絵 (2016) : 角質ピーリン
グ清拭、石鹸清拭、熱布清拭の比較 角質
水分量と皮膚表面 pH および主観的評価を
用いて, 健康科学 : 京都大学大学院医学研
究科人間健康科学系専攻紀要, (11), 17-
22.
- 賤川 和佳, 岡崎 豊, 濱口 一宏 (2010) : 清潔
の援助に対する患者の思いを知る 整形外
科手術後患者を対象としたインタビュー調
査より, 国立高知病院医学雑誌, 19, 75-
80.
- 宇井 直美 (2009) : よりよい「清拭」への取り
組み, 米沢市立病院医学雑誌, 28巻1号,
56-58.
- 山下 奈緒子, 佐伯 由香 (2016) : 皮膚の清浄
度ならびに皮膚生理機能に及ぼす清拭の影
響, 看護人間工学研究誌, (16), 9-14.
- 吉田 早矢香, 小沢 由佳, 荒木 美穂 (2012) :
術後侵襲下にある患者に全身清拭が及ぼす
影響 胸腔鏡下肺葉切除術をうけた患者の
バイタルサインの推移からの検討, 日本看
護学会論文集 : 看護総合, (42), 46-48.

